第44回技術士の夕べ
「意見交換会：部会員の福島支援活動の経験から、住民目線のリスクコミュニケーションを考える」

日時：2015 年 3 月 6 日（金）18:00～20:00
場所：日本技術士会葺手第 2 ビル 5 階 AB 会議室（⇔近畿地区との Web 中継有）
進行：（佐々木幹事）
参加者：45 名（講師含む）

原子力・放射線に対する不信感が根強く残る中、信頼や理解を得ている活動がある。「住民目線」が共通して深く関わっており、この経験を共有したいとの思いで今回の会合を企画した。部会員の事例と専門家の御経験にもとづく講演（第1部）と、参加者の感想をベースした意見交換会（第2部）の二部形式で行った。第 43 回技術士の夕べに引き続き、当部会設立10年目に取りまとめた活動方針※を受けた企画の第二弾である。

※原子力・放射線部会の過去 10 年を振り返っての今後 10 年の活動方針について
（http://www.engineer.or.jp/c_dpt/nucrad/topics/001/attached/attach_1447_1.pdf）

【第1部：講演】
専門家の講演に先立ち、当部会員による福島支援活動としての成功事例を2件紹介。1件目は「福島からの避難者との対話活動から」と題し（中田よしみ幹事）、説得の困難さと互いの（話を聴いて一緒に考えていく）関係の構築が大切という趣旨を、2件目は「福島県内での活動、除染情報プラザへの協力」と題し（高橋一智幹事）、難しくとも自分で勉強したことをもとに、話の流れも自分で組み立てることが大事（ありふれた情報源をもとに話した場合、質問への回答に苦慮すればその時点で信頼は失われる）という趣旨を、それぞれの経験から紹介した。
引き続き、個人の福島支援活動から専門知を住民に伝える取り組みとしての参考として、専門家からの事例を講演頂いた。

演題 ： 放射線をいかに語るか 福島事故の経験から
講師 ： 伴 信彦氏
（東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部 教授、ICRP(国際放射線防護委員会)第一専門委員会委員、UNSCEAR(原子放射線の影響に関する国連科学委員会)日本代表団アドバイザー、日本保健物理学会 前理事「暮らしの放射線 Q&A 活動委員会」元委員長）

伴氏は「東電福島第一原発事故が起きて人生が変わった。本日は、その経験から学んだことを主観的に講演したい。」と 3 つのテーマを提示して講演を始められた。以下に概要を記す。

（1）暮らしの放射線 Q&A サイト
「暮らしの放射線 Q&A 活動委員会」(Q&A 集は国会図書館アーカイブで現在も閲覧可能)の発足経緯に続き、質問文の行間を読むこと（質問の意図をくみ取り、その人が抱えている問題の本質を理解しようと努める）、人々が抱く不安を否定するのではなく、そのまま受け止めること、自分の意見や考えを押し付けないことなど、本活動を通して得た教訓について話された。

（2）飯舘村でのリスクコミュニケーション推進委員として
住民や村の職員とのコミュニケーションにおいて車座での対話が有効と感じられたこと、地域に根差した「つなぎ役」の重要性、言葉の大切さ（「安全」「大丈夫」等の言葉を安易に使わない）など、飯舘村での活動を通じて学んだ教訓について話された。

（3）ICRP（国際放射線防護委員会）ダイアログセミナー（2011 年秋～2015 年 9 月（予定））

チェルノブイリ事故等の経験を基に、汚染地域で暮らす人々の為の放射線防護についての指針をまとめた Publ.111 との関係、セミナーの開催背景、成果、具体的な実施方法※について御紹介頂いた。

※テーマに沿ったステークホルダーが車座になってプレゼンテーションとダイアログ(対話)を行う。後者では司会進行の下、参加者が一人数分程度で順番に意見を述べていく。一巡すると、もう 1 回ずつコメントを求められる。この間、途中で別の人が口を挟むことは無い。

（4）まとめ

相手の話を聴くこと、語られない言葉に耳を傾けることが大切であり、一人ひとりの背景事情を把握した上で、意思決定を肯定しサポートするのが基本姿勢。汚染地域に住む、帰還すると決めた人にこそ、本当にリスコミが必要で、これからの対応が一層重要になると思われるなど、講演の内容をまとめられた。

【第2部：意見交換会】

1．会場で発言された意見

上記講演を受け、次の3つの視点で意見交換を行った。

①原子力・放射線に関する専門知を、被災された住民、一般の人々、他分野の技術者に伝えるために、技術士は自らの言動に関して何に気を配り、どのように行動すべきか？ ②クライシスコミュニケーションのために、平時より、個人として部会として何を準備しておくべきか？ ③福島の復興のために、技術士は自らをどう位置づけ、どのような活動を行っていくべきか？

①について：一方通行で説得しようとしたり、使う言葉を誤ったことに対する反省があった。被災者の心の傷は相当深く完全には寄り添えないかもしれないことに留意し、具体事例などを使って相手の意見をじっくりと引き出し個々の考え方を認めること、そのためには普段からの言葉、表現、話し方への配慮の習慣化、専門知を「伝える」という意識が上から目線になりがちであることを言い聞かせて行動していくことが大切なのではないか。

②について：事故後、専門外の説明には躊躇があった一方、誤った説明や相手を思いやらない無責任な説明には憤りを感じた。個の『準備と訓練』としては、専門分野の深掘りに加え幅広い知識（但し自身が納得できる内容で）と①で求められるコミュニケーション能力を身に付けておくことが必要と考えられる。マスコミで次々と話題に上がる事象に、個が備え尽くすことは難しいが、部会などの集団であれば対応できる可能性は高まる。危機に備え、言葉の定義も含めて準備し、「他の人に伝えるために何をしたらよいか」「誰がどんな役割を担い、どのような体制で臨むべきなのか」を個人として部会として準備しておくことが大事で、この考え方は部会の今後 10 年の活動方針※を踏まえた活動方針にも通ずることを再認識した。

③について：帰還が現実的になるにつれ復興支援はその重要性がこれから更に増してくることを拝聴し、被災者が望んでいることを深く聴き出し、可能な範囲で寄り添う活動をすべきと受け止めた。地元から信頼を得る「つなぎ役」と、ICRPダイアログセミナーでの車座での手法を参考に、技術士の活動にも大いに反映、実践していきたい。更に技術士が持つ資質向上と公益確保の 2 責務を組み合わせ、一般的な原子力関連組織の技術者とは違う立ち位置であることの認知も視野に入れて考えていきたい。

意見交換の中で、言葉の使い方について、その言葉が相手にどのような印象を与えるかを考えておく必要がある旨、伴氏から2つの事例をもとに補足頂いた。「低線量被曝の影響に関して科学的には分からない」とのフレーズでは、その趣旨がきちんと伝わらないと、科学的に何も分かっていないという絶望感を与えてしまう事例。ここでは、絶対に影響が無いと証明はできないが、影響があったとしても検出できないほど小さいという趣旨を伝えることが重要。またホールボディカウンタ(WBC)

は同じ生活をしているならば大人を測った方が顕著に結果が現われるが（子供は代謝が速く、体内に蓄積する放射能量が相対的に少ないため）、早野龍五先生(東京大学)が開発した乳幼児用のWBC「ベビースキャン」は、親からの「子供を測って欲しい」という強い要望に耳を傾けたところから生まれ、実際、ベビースキャンでの測定が、重要なコミュニケーションの機会になっているという事例。

2. 講演メモ（個人の考えを整理するため講演前に配布）**にて頂いた意見**

頂いた意見はそのまま別添に記す。概ね会場と同様の意見だが、4.最後に一部引用する。

3. まとめ

「今有効な原子力専門家と人々との対話とは、人々が原子力について何をリスクとして考えているかを専門家が人々から教えてもらうための対話である。」という原子力学会誌3月号※巻頭言（吉川弘之氏）を引用し、桑江部会長より今回の企画の意義を改めて示された。また「これからの新しい専門家として必要な能力とは、社会の利害から独立で、科学者の全意見を知って中庸な意見を述べる能力である。」と謳われていた記事からも、技術士の目指すところとも一致するので、参考として欲しいとのメッセージが示された。

※部会は、これまでの福島支援の取り組みと、過去 10 年の活動評価と今後 10 年の活動方針について示し、自主的・継続的安全性向上と倫理、部会方針の趣旨との同一性に関わる記事を「知の統合」という企画で執筆。

4. 企画を終えてと今後に向けて

個の経験と普段からの備えに対する考えに大きく依存する企画であることから、事前学習を前提としたが、意見は特定の人に偏った結果となった。講演時に解答の多くが示されたことと、経験の差からそれ以上の意見が出しにくかったことが要因の一つと考えられる一方で、「質問全体として、総論と各論の壁がある。根本原則はあるが、個々の回答は多様で広範囲である。」や、「中田氏の講演のように具体的な質問であれば意見が増える。」といった意見が講演メモの中で示された。教科書的な意見ではなく、それぞれの技術士の異なる体験から、個別の事例に基づいた意見を語って欲しいというのが企画の意図したところであり、住民目線のコミュニケーションが身につく過程を示すものと考えます。

企画は今回の一度で終わりではなく、また1年後にフィードバックを行う予定で、今後どのような活動をどういった視点で具体的に行っていけばよいか（自身の意見の整理と行動）を考えるきっかけにこの例会が役立つことを期待したいと本企画進行を務めた佐々木部会幹事から締めの言葉があった。

以　上